

スピード写真処理ソフト“低価格でがっちり”の SPRINT を使用して

証明書写真、主にスピード写真に特化したソフトである。あくまでソフトであるから出力のハードはユーザーが決めるのだが、基本的には昇華型のL判もしくはハガキサイズのプリンターに合わせて作られている。

昇華型プリンターは賑やかなインクジェットプリンターの競争の陰に隠れているが、デジカメから直接プリントするという部分ではキヤノンを中心に熱心に販売されている。その品質は証明書写真には充分であるし、耐光性に関してはむしろインクジェットより優れているので、大判の必要性がない証明書写真には適している。実は私が SPRINT の導入を決めたのは、PIE2008 で行われていたデモで、昇華型プリンターの品質に納得したからでもある。実際には色調整の部分で苦労はしたが、スピード写真という分野の中では充分すぎるほどの品質が出るから、1年間の使用で今まで不評は出ていない。

実は実際に使いだしてからこの原稿を書くまでに時間がかかってしまったのは、うちの店の今までの方向性が原因だった。撮影から仕上がりまでに全く調整の余地がないポラ・フォトマの証明書写真をお客様にお勧めしたくないので、なんだかんだと説得して、極力3日後仕上りのコースをお勧めしていた。これを20年も続けたものだから今更急ごうというお客様などほとんどなく、つまり教育された熱心なお客様ばかりになってしまい、皆様ゆとりを持って店頭におこしになる。SPRINT を評価するほど使い込むのに、思い切り時間がかかってしまったのだ。人の流れの多い立地条件の店舗ならば、毎日使いこなすことになるだろう。

撮影はもちろんデジカメだが、カメラを縦位置にせずに横位置で撮影するのが好ましい。昔ながらの撮影をしていた写真館にとっては左右の空きが気になるだろうし、狭いスタジオだと左右にバックが足りずごちゃごちゃした店内が写ってしまうが、そのあたりは時代の流れなのだと気にせず撮影しよう。ミニラボ導入前の写真館では、カラー証明書写真を撮影する際、被写体までの距離を変えたりズームを使うなどして、サービス判で各種サイズが仕上がるよう工夫していた店も多い。そういった場合には、ほぼもれなく無駄な写り込みがあったはずなのだ。今更気にする必要など毛頭ない。

撮影が済んだらお客様を待たせて仕上げるわけだが、お客様を受け付けている間に、SPRINT とプリンターの立ち上げは完了しておこう。

SPRINT の最も優れているのは、撮影データからサイズに合わせたトリミングで仕上げるまでの操作部分にある。撮影データを選ぶと、有無を言わず操作画面上に十字のスケールが現れる。まず頭頂部に合わせてクリックし、次にあごに合わせてクリックする。これで顔の大きさがソフトに認識されるわけだ。当然その後の操作は、この顔の大きさを元に行われる。

例えば市販の履歴書で使われて最も頻度の高い3×4cmのプリントを得るためには、たとえばphotoshopならばトリミングツールを使ってバランスを考えながらカットするのだが、SPRINT の場合は最初の段階で顔の大きさをソフトに教えたら、後はサイズ指示をするだけで、おまかせになってしまう。特にパスポートなどのように顔の大きさと全体の大きさに決まりのあるものはもちろんだが、それ以外のサイズでもソフトがバランスを決定する。

当たり前のように、これは大変なことだ。私は代写(この言葉の通じない地域もあるようだが、つまりその会社のカメラマンのふりをするフリーカメラマンのこと)経験が長かったので、たくさんの写真館の状態を見ているが、実は証明書写真のなかの顔の大きさは驚くほど様々だ。



SPRINT の販売元は広島県の写真屋さんのアートさんだが、プログラミングに協力している若者も、自ら写真店を営んでいる。つまり、単に写真業から頼まれたプログラマーではなく、実際に撮影に携わりつつ開発をした者の自信から出た結果であろう。頼まれたプログラマーならば、基本サイズの設定を先にさせるであろう。もちろん調整はできるので、押しつけられるという心配はない。

次にすごいと思ったのは、シート上に配置する部分だ。3×4cm のサイズは確かに多いが、証明書写真は「普通」という言葉が使えないほど書類の作成者がそれぞれに決めている。正にミリ単位で好き勝手。写真を貼り付ける用紙ができあがってから計って写真サイズを指定しているのだろう。

一般的なサイズとミリ単位で設定する好き勝手なサイズ。それらの枚数を指定すると、1枚のシートに無駄なく自動的に配置してくれる。もちろんレイアウトも画面で確認できる。通常はカットの目印になるトンボ(印刷用語:最終的に切り落とされて印刷物には残らない)を入れてプリントアウトされるが、指示でトンボを消すこともできる。これ、瞬裁機を使う場合はトンボがない方が便利という、業界を理解した上での設計だ。この様な設計に至った理由、私も写真屋として気持ちは良くわかるが、シート配置はどんなアルゴリズムで実現しているのだろう。かなりすごい技術の気がする。少なくとも数の売れない専門ソフトで、かつ 30000 円のソフトに組み込まれる機能ではなからう。

証明書写真は、一般的に固定された環境で撮影される。光線の状況、距離、絞り・シャッターを固定すると、顔色による微妙な調整以外はプリセットでしのげる。SPRINT の場合も、濃度・色調・コントラストの調整をプリセットできるので、撮影状況さえ固定できれば、ほぼ無調整でプリントしても納得できる品質に仕上げられる。もっともお客様サイドではなく、撮影サイドのこだわりで品質を考える写真館では、やはり画面の色を見ながら1人1人調整することになるだろうが。

調整されたデータは、フロッピーでお客様にお渡しして、バックアップとして作業したパソコンのHDに独自に保管する。データ形式は独自のものなので、勝手に使われてさよならということはない。データを呼び出すためのナンバーも提供されるのだが、ぼちぼちフロッピーも消えつつあるので、その部分の改善が望まれる。ちなみにうちの店ではデータは渡さずカードだけなので、その都度保存先を作成している。

トンボは印刷物のカットならば良いのだが、証明書写真の場合、押し切りカッターで切るので、途中の段階で残りを切るトンボが消えてしまい、押し切りではなく定規とナイフの方が切りやすい状態になってしまう。プラスαの機能として、フォトラマシステムのように、少し大きめの枠をボールペンで記入してカットの段階で線を切り落とすと丁度良いサイズになるという、一番単純な機能を期待したい。トンボより簡単でしょ。仕上がりがサイズ+1mm の枠線を表示させるだけなんだから。

しかし一番の問題はプリンターだ。たまたま私の使っている機種が弱いのかも知れないが、最初のプリントでは、ほぼ半分がホコリでダメになる。3×4cm を2枚所望のお客様の場合は良いが、3枚とか4枚欲しい場合は、最初から2シートプリントしている。そのぐらいホコリが入るのだ。最近のキャノンセルフイーが大きな箱になっているのは、ホコリ対策の気がする。

今、フォトラマシステムを売ったり捨てたりして、処分している。買ったとき、いくらいただろう。4眼が 10 万円したっけ。パスポートを撮る FP-14 はもっとしたよな。フィルムは1枚 200 円~500 円。ゼラチンフィルター、まるでコレクションのように持っていたな。昇華型プリンターは2万円前後。SPRINT は 30000 円。プリント単価は1シート 35 円。導入を懸念する金額ではない。

ごぞんじ東村山市のドーバーフォト
代表 近藤 誠